

## スタンダードの小説のトポグラフィ

白田 紘

## 序

近代になって、小説のなかでリアリティーというものが追求されるようになったことは改めて述べるまでもない。現在では、小説は虚構、つまり空想の産物であるにもかかわらず、現実離れした、本当らしくないものに対して、寓意や象徴を目的とするのではない限り、低い評価しか下されない気配さえ感じられる<sup>①</sup>。さらに言うならば、どこかに本当らしさを漂わせていないと、マイナーな作品と見なされる傾向がある。これは、本来まったくの空想の産物であり、ある点でマイナーな文学と考えられていた大衆小説にさえ影響を及ぼしている。たとえば、かつては空想科学小説と呼ばれていたものはサイエンス・フィクション(SF)となり、

やはりそのぶん想像力は科学的実現可能性が推測される方向を辿るべく制御されているように思われるし、探偵小説や時代小説も推理(論理的妥当性)や歴史(歴史的考証)に依拠する傾向が強くなっていくようである。いわゆるまったくの《おとぎ話》は、ファンタジーと呼ばれる衣に着替えた世界、主として児童文学の世界を別格として、次第に片隅に追いやられているのではないかと考えられる。

もっとも、小説の世界を離れて映像の世界に目を転じれば、そこでは、従来は現実中存在するもの(それが作られたもの、ミニチュアであっても)しか表現し得なかったが、科学技術の発達で特殊効果(SFX)と称するものが誕生したために、空想を自在に映像に展開してリアリティーの呪縛を乗り越えているかのよう<sup>②</sup>に思われる。

小説においてリアリティーを醸し出す要素はいくつかあるだろうが、物語やその登場人物のリアリティーのおおもとに、その物語が展開する時代や場所といった、いわば《舞台》のリアリティーというものが重要であると考えられる。空想的な昔話においては、「昔々……」という決まった書き出しによる時代的な不特定性が大きな特徴だが、場所についても「ある所」であったり、どこでもないような地名を、話が語られたり読まれたりする場所との関連で提示して、時代と場所の束縛から自由な点が注目されよう。それはヨーロッパの中世やルネサンス、そしてバロック時代の物語（フランス語のロマンやヌーヴェル）においても同様であり、仮に「いつの時代のことである」とか「どこのことである」とか書かれていても、その時代や場所は他のものに交換可能なものであり、遙かに遠い時代の遠い場所であることを示して、空想的物語を実際の話のように見せかける手だてに利用されることがあった。まして、時代や場所が物語と緊密に結びついていることなどありえなかつた。

フランスにおいては文学史上、ラファイエット夫人（一六三四～九三）の小説『クレヴの奥方』*la Princesse de Cleves* (1678) が近代小説の祖と呼ばれているが、これはまたフランス心理小説の祖とも見なされている。この小説では舞台設定についても、物語と緊密な関係をもっている。時代はアンリ二世の御代とされ、主人公のクレヴ公夫人は宮廷に出仕する女性であるが、自邸と宮廷

のあるパリとそれにクレヴ公の別荘のある郊外のクローミエが物語の展開するその主な場所である。時代的には、作者は自分が知っているルイ十四世の宮廷を、半世紀ほど前に遡らせた時間のなかまに置いていたのだが、様々な歴史的事実や人物をまじえることによつてアンリ二世の御代を描き出し、ある意味で歴史小説の様相さえも呈している。しかし物語では、クレヴ公と結婚したものの、宮廷で夫人に対して好意を見せるヌムール公に惹かれてしまふ夫人の情念と徳の葛藤が心理的に描かれる。夫人はヌムール公を避けて、クローミエに引つ込む。パリが権謀術数の渦巻く宮廷の存在する場所、夫人にとつては愛する人を眼にすることで苦悩を与える場所であるのに対して、クローミエは夫人に安らぎを与えるいわば避難所である。しかし、クローミエでは、夫人は別荘に引きこもることを不審に思った夫に問いつめられ、ヌムール公への想いを白状させられ、また夫人の姿を見るために別荘の敷地内に忍び込んだヌムール公が夫人の本心を覚るという事態に展開する。パリとその郊外のクローミエとは、物語の展開に緊密な関係を保持する場所であることは明らかであろう。読者がクローミエは実際にどこなところか分からないにしても、また場合によつたら架空の場所と想像しても、パリ郊外の別荘地という地理的条件は充分に理解できるし、ここが物語のなかでパリに対して占める意味合いは納得できるものである。

『クレヴの奥方』に関して長く述べることにした。この小説

はスタンダールが《賞讀すべき一冊》と褒めたたえ、その《自然さ》を高く評価している作品であるが、その舞台設定についても、作品のリアリティーに貢献しているのである。

スタンダールの小説については、心理分析だけでなく、その作品が描く時代のリアリティーが評価され、物語の展開と時代は緊密な関係を保っているが、ここでは物語の展開する舞台となる《場所とその様相》、つまりトポグラフィーについて考えてみたい。<sup>③</sup>

## 1

スタンダールの最初の作品『アルマンズ』（一八二七）は、デユラ公爵夫人（一七七八―一八二八）の書簡体小説をもとにアンリ・ド・ラトゥシュ（一七八五―一八五二）が出版した作品『オリヴィエ』*Olivier* (1826) にヒントを得て書かれた作品である。<sup>④</sup> ラトゥシュの作品ではルイ十六世の治下に時代設定されているが、スタンダールの末期に舞台を設けた。そして主人公のオクターヴ・ド・マリヴェールに、この時代を生きる才知ある貴族青年の閉塞感を、精神的かつ肉体的に体现させた。

この小説の物語は、『クレレーヴの奥方』におけるパリとクーロミエと同じように、パリとその郊外のアンデイイという地理的な位

置関係のなかで進展する。パリには貴族の邸宅街であるフォール・サン・ジェルマンにマリヴェール侯爵の邸や、マリヴェール夫人の従姉妹であるボニヴェ侯爵夫人の邸があり、同じくシヨセ・ダンタンにドーマル伯爵夫人の邸があるとされる。そしてアンデイイはボニヴェ侯爵の別荘のある土地である。

オクターヴの母のマリヴェール夫人は、息子の「人間離れた」生き方を心配してボニヴェ夫人のサロンに出るように勧め、そこでオクターヴはボニヴェ夫人の遠縁の娘（つまりマリヴェール夫人にとっても縁者）である孤児のアルマンズ・ド・ゾヒーロフに出会い、彼女の人柄に注目する。アルマンズもオクターヴに心を惹かれるが、彼女は財産がないので、一八二五年に施行された貴族財産保障法によって二〇〇万フランという大金が手に入ることになったマリヴェール侯爵家の御曹司とは身分違いと認識し、彼女の気持ちも隠している。かれに近づくことが金を目的にしていると思われたくないアルマンズは、縁談がもちあがっているという嘘の話をオクターヴにするが、それでいてオクターヴがドーマル伯爵夫人と近づくになると、夫人に嫉妬心を起こす。一方、オクターヴも、かれの家に財産が入ることでサロンに集まる人々からちやほやされるが、そのことでかれの人間が変わってしまったとアルマンズに思われたくないという気持ちでいながら、それを伝えることができない。そしてかれはアルマンズの結婚が近づいているのではないかと悲しい気持ちでいる。このオクターヴに、

ポニヴェ夫人の別荘に滞在中のドーマル伯爵夫人は、一同がアンデイの森を散歩しているときに、かれがアルマンスを愛していると当人に指摘する。伯爵夫人は、散歩するオクターヴとアルマンスの様子を見てオクターヴの気持ちを見抜くのだが、一方、オクターヴはその指摘になぜか「不幸の淵」に突き落とされる。

ここでスタンダールはラファイエット夫人の作品のなかにはないような情景の描写を、過剰な形容詞をつけて、次のようにおこなっている。

「ある晩、焼け付くように暑い一日のあとで、みんなはアンデイの丘を覆う美しい栗林を、ゆつくりと散歩していた。日中は時おり、ものずきな人たちがやってきて、この森の趣をだいなしにするのである。美しい夏の月の穏やかな光に照らされて、魅力的なその夜は、ひと気ない丘々がうっとりするような眺めを見せていた。こちよい微風が木の間にたむむれ、この甘美な宵の魅力をいちだんと加えていた。」(第一十六章)

この描写のなかでアンデイという土地についての情報は、栗林に覆われた丘であるということだけである。

こうしてアンデイは、オクターヴにアルマンスを「恋している」ことを認識させる土地となるが、オクターヴは逃げるようにこの土地を去ってパリに戻る。次にかれがここに来てくるのは、パリで決闘をして負傷し、急いで駆けつけたアルマンスに病床で自分のほんとうの気持ちを打ち明けたあとである。かれは決闘の

傷がもとで死ぬのではないかと思い、愛情を告げたのだった。二人のあいだに誤解が解け、アンデイでは満ち足りた平穏な生活がやってくるはずであったが、アルマンスとオクターヴのあいだにはまだわだかまりが存在して、それを二人は館のなかで手紙を交換することで解消しようとする。

アンデイは二人の主人公たちを結びつける場所として小説のなかで重要な位置を占めている。登場人物たちの住むパリに近く、そことたやすく往復でき、また親類縁者のみならずサロンの主要なメンバーが寄り集まることのできる別荘は、静養だけでなく、狩りや乗馬や散歩といった娯楽を提供し、パリの閉ざされたサロンに較べて開放的である。

この構図は、『赤と黒』のヴェリエールとヴェルジエ、『リュシヤン・ルーヴェン』のナンシーとビュレルヴィレルの森にも再現される。場合によっては『パルムの僧院』のミラノとグリヤンタ、ないしはパルムとサッカも考慮できるかもしれない。

## 2

『赤と黒』(一八三〇)は第一巻で、フランシユ・コンテ地方にあるという設定の小さな町ヴェリエールが舞台となる。この町については小説の冒頭で細かな描写がある。この描写で注目されるのは町と産業が結びついていることである。この町を流れるドゥー川

とこの川に流れ込む支流の流れを利用して、ミュールーズ産と称して販売している更紗の製造で町は潤い、主人公のジュリヤン・ソレルの家をはじめ多くの製材所が稼働し、町長のレナル氏は大きな製釘工場を経営して儲けている。王政復古時代となり、フランスの地方都市にも産業の波が押し寄せるが、その様子をこの町に象徴的に描いている。そしてこの物語が貴族階級の世界ではなく、ブルジョワや庶民の世界を描いていることを伝えている。

しかしこの冒頭の描写ではつきりしないのは、その地理的な様相である。

「ヴェリエールは北を高い山で囲まれているが、それはジュラ山脈の支脈のひとつである。鋸の刃のようなヴェラ山のいただきは、十月の最初の寒気到来から雪に覆われる。山から迸る急流はドゥー川に落ちる前にヴェリエールを横切り、多数の製材所に動力を与えている」(第一巻第一章)

この描写によるとヴェリエールの町は北に山を背負い、南にドゥー川があると推測できる。レナル氏の邸宅もまた石垣を築いた庭園が川に向かって下っているから、南に面しているのだろう。そこからはどの方向か分からないが「ブルゴーニュを囲む丘陵に限られた地平線」が見える。そして、町長は自邸のみならず、川から百ピエ(一ピエは約三〇センチ)あまりの高いところにある町の散歩道に高さ二〇ピエ、長さ三、四〇トワース(トワースは約二メートル)の石垣を築いて、そこを忠誠散歩道と命名している。この

散歩道の胸壁に寄りかかった旅人の「わたし」はドゥー川を目前にして、次のように描写している。

「彼方、左岸には五つ六つの谷が蛇行し、その谷底に小さな水流がとてもよく見定められる。それらが滝を連続させて流れきたあとドゥー川に落ちるのが見える」(第一巻第二章)

これによれば、川は左から右に、つまり東から西に向かって流れていて、対岸もやはりドゥー川に向かった斜面でいくつかの小さな川が土地を削って谷を作っている様子が想像できる。しかし、これはスタンダールの描写をつなぎ合わせての推測である。レナル氏は自分の庭を広げ四番目のテラスを作るために、ソレル老人の土地と交換に川の下流の岸辺の土地を好条件で譲つたとされるが、それについても、どこをどうしたのか具体的には何も浮かんでこない。

このように、いかにも地理的に正確に地形を描いたような書き出しは、実際にははつきりとしなないし、これは美しい描写であっても意外に具体性に欠けている。読者は漠然とこの土地を想像するだけである。スタンダールの意図は地理的な詳細を描くことよりも、やはり土地の産業とそれに従事する登場人物たちを描くことだったと言っている<sup>5)</sup>。

さてこのヴェリエールで主人公のジュリヤン・ソレルは、シエラン神父の紹介で、家庭教師として町長のレナル氏に雇われる。かれの貧しさに同情したレナル夫人は、やがて夫やその仲間の

ブルジョワたちとは違ったこの青年の美質に気づき、かれを愛するようになる。一方、野心に燃えるジュリヤンはこのやさしい夫人を手に入れ、出世の足がかりにしようと考ええる。こうして春が来て、一家がヴェルジーの別荘に移動することになる。この土地については「それはあのガブリエルの悲劇的な恋物語で有名になった村である」とだけ書いている。しかしここはヴェリエールからさほど遠くないことが、町の用事で町長が行き来し、またヴェリエールの人々が晩餐に招かれていることから分かる。ジュリヤンとレナール夫人の関係が進展するのはこの村でのことである。ジュリヤンはこの土地で、「しかも世界でもっとも美しいこの山々のなかで」生きる喜びに酔いしれる。かれはレナール夫人の親友のデルヴィール夫人がやってくる、レナール夫人が作業員を雇って作らせた並木道の突端から、「スイスやイタリアの湖水地方のもっとも美しい風景にまさるとは言えないまでも、それに匹敵する」景色を見せ、ナラの森に縁取られた断崖に出ると、そこからの眺めが「モーツアルトの音楽のように思える」とデルヴィール夫人に言わせるのである。こうして美しい土地ヴェルジーが二人の恋愛に舞台を提供する。

しかし、ジュリヤンがレナール夫人との関係を進展させるのは、かれの手が彼女の手に偶然触れた瞬間にそれが引つ込められたことから自尊心を傷つけられ、この手を引つ込めさせてはならないと思つたことにはじまる。ブルジョワに対して庶民の息子のジュ

リヤンは激しい憎悪を抱いているのだが、夫人のやさしさと、自然の美しさのなかでそれを忘れかけていたのである。こうして、苦しみの果てに夫人の手を握り、一方、恋というものはじめて知つた夫人は、ジュリヤンに夢になつていく。ジュリヤンも再び野心や憎しみを忘れて夫人を心から愛するようになる。

ヴェリエールはジュリヤンにとつて、仮にラテン語をよく知つていても、家庭教師が単なる使用人にすぎないと、社会的な身分を思い知らされる場所であるのに対し、ヴェルジーは一時的に夫人が「敵側の陣営で育つた女」と感じることはあつても、かれに野心を忘れさせる所である。この小説の最後で、ジュリヤンはレナール夫人を狙撃するに至り、逮捕され牢獄に収容されると、このヴェルジーでの幸福を懐かしむことになる（第二卷第三六章）。

以上のように、場所はフランスの東部フランシュ・コンテ地方の町とその郊外であるが、地方とはいへブルジョワたちの人間関係が入り組む町と、人間臭さを脱した、自然が身近にある田舎が対立し、後者において恋愛が育まれ、物語が前進させられる。

ジュリヤンはこのあと町で夫人との仲が噂され、レナール家にかれを紹介したシエラン神父の忠告で、この地方の中心城市ブザンソンの神学校に入ることになるのだが、やがてまた、そこから首都のパリに上つていくことになる。より大きな都市へと、かれの野心にふさわしく、かれは出て行くのだが、それがかれの幸福とは逆方向になることは推察できることである。

## 3

さて次にスタンダールの未完の大作『リュシヤン・ルーヴェン』（二八三四執筆手）にナンシー<sup>(8)</sup>とビュレルヴィレールの森の関係をみてみよう。

主人公リュシヤンはバリの銀行家の御曹司であるが、理工科学校を除籍になると、父の会社に週に一度顔を出し、それで高給を得ている。しかしかれは父に養われることから脱するために、従兄に槍騎兵第二七連隊のフィロトー中佐を紹介してもらい、この中佐に取り入って、連隊の少尉に任官する。第二七連隊はナンシーに駐屯する部隊で、この町は「近道をすればライン河まで一九リユー<sup>(9)</sup>」というドイツ国境寄りの町である。こうしてかれは当地の駐屯地にやってくる。合流した部隊とともに町に到着したリュシヤンの見た町の感想を、次のようにスタンダールは叙述している。

「ナンシーはリュシヤンには醜悪に思えた。汚さ、貧しさ、さもしさ、無味乾燥でしかも金とか不幸しか考えていない顔つきが、そこに住まいを定めているようだった。(…)狭い街路は、舗石もきちんと敷かれてなく、曲がり角や袋小路がやたらとあり、汚い水の流れだけがさわだっていたが、その流れもスレート瓦を煮出したような泥水がやっと流れていた」

（草稿第四章）

リュシヤンがバリからやってきたブルジョワの御曹司の軍人であるせいか、ナンシーの産業については、レース編みの女工がいること以外には何も注目されていない。

ところがリュシヤンは町に到着すると早々に街路で落馬してしまふ。それは大きな家の前のことで、その二階にある緑の鎧戸付きの窓のなかばカーテンを引いたなかから通りを眺めていた金髪の若い女に気を取られて、かれが何気なく馬に拍車を当てたため、馬が脚をすべらせたのだ。そしてこの体たらくがその女性にすっかり目撃されてしまふ。この女性こそ町でいちばん美しいという評判の女性の一人であった。彼女はボンルヴェ侯爵の娘で、シャステレルという近衛少将と結婚したが若くして未亡人になっていた。リュシヤンはこの女性に関心を寄せ、宿駅長のプーシャールから情報を得、またこの家の近くのキャビネ・リテレル（新聞や書籍を閲覧させたり貸したりする店）に通って家を見張るといったこともする。かれは兵営に入らず、トロワ・ザンブルールというホテルに最高の部屋を取り、やがてかれが銀行家ルーヴェンの息子だという噂が広まると、次第に町の貴族やブルジョワたちの仲間に加えられ、この退屈な町の保守的な社交界に接近していく。しかしシャステレル夫人とはなかなか面識を得られない。

目的の夫人と出会うのは、かれがセルピエール邸を訪問中のことであった。夫人の来訪が告げられると、かれはすっかりごちなくなくなり、それまで發揮していた才知の陰も消えて話すことすら

できなくなってしまう。リュシヤンはセルピエル夫人からシャステレル夫人に紹介されるが、かれは真つ赤になって、気の利いた言葉のひとつも口に出せない(草稿第一四章)。こうしてリュシヤンは噂にのみ聞いていたシャステレル夫人と面識を持つわけだが、そのあとでも、身持ちが正しく社交界でも一歩引いたところのある夫人にかれはなかなか近づけない。かれは思い切って手紙を書き、自分の気持ちを打ち明けるが、夫人はかれの気持ちを知りながら、かれに些かも希望を与えない気配を見せない。

このナンシー郊外にはビュレルヴィレルの森という、いわばナンシーの上流階級の散歩場になっているところがある。そこはナンシーでも美人の評判の高いドカンクール夫人が男たちとしばしば行楽に出かける場所と、宿駅長がリュシヤンに紹介しながら、「いいところですよ。そこには《緑の狩人》というカフェがあつて、当地のチヴォリといったところですよ」と付け加える。リュシヤンは連隊で勤めのないときには、この森に乗馬訓練に出かけるが、あるときは考え事をしていたために、ナンシーから七リユーも離れた地点まで踏み込んでしまう。

シャステレル夫人がかれに好意を見せるのは、この森に出かけたときである。セルピエル邸のサロンにいた夫人とリュシヤンは、この家の令嬢たちの提案で一家とともに森の《緑の狩人》へ馬車で行く。夫人も家のなかでは気が滅入ったため気分転換を計りたいと思つていたので。ここではじめてリュシヤンは「長い

時間おもいきつて夫人の前で、そして夫人に向かつて話し」、ついに夫人はかれに腕を預ける。<sup>11)</sup>

「その夕べ《緑の狩人》のカフェ・ハウスには、ボヘミアのホルン奏者たちがいて、甘く、単純で、ゆつたりした音楽を、うっとりとするように演奏していた。これほどにやさしさにあふれ、心を奪うものではなく、これほど森の大樹の背後に沈んでいく太陽と調和するものはなかった。時どき、太陽は深い緑を透かして光を投げかけ、広い森のこのたいそう感動的な薄闇に命を吹き込むように思われた。無感動な心の持ち主がいちばんの敵に数える魅惑の宵であつた」(草稿第二三章)

こうした雰囲気の中で二人の心は接近していく。リュシヤンはシャステレル夫人宅の訪問の許可を取り付ける。しかしシャステレル夫人はかれを自宅に招いても、決して二人きりで会おうとはしない。そんなかれらは再び期せずしてセルピエル邸で会い、またしても令嬢たちの提案で森へ出かけることになる。シャステレル夫人はためらうものの、自分が行楽に行かないとなると、令嬢たちも出かけないだろうと考えて馬車に乗る。こうして森に到着して馬車を降りると、夫人とリュシヤンはボヘミアのホルン奏者の演奏するモーツァルトを聞きながら、幸福感に浸されて宵闇のなかを散歩する。<sup>12)</sup>

以上のように、無味乾燥なナンシーの町のなかになると、夫人はリュシヤンの気持ちに応えようとしないが、ビュレルヴィレ



ルの森では心を開いて、かれの真摯な気持ちを受け入れる。リュシヤンの方も、ナンシーの町が新しい町のように見えてくる。しかしながら誤解からリュシヤンは夫人には愛人がいると思ひこみ、彼女への想いが真剣だっただけにその衝撃から町を立ち去ることになる。パリに戻ったリュシヤンは、やがて父の紹介で内務大臣ヴェーズ伯爵の秘書となり、七月王政下（二八三〇〜四八）のバスノルマンディで政争のなかに巻き込まれていく。

この小説では、ナンシーとビュレルヴィレルのほかに、ナンシーから六リユールのダルネーという町が出てくる。リュシヤンがシャステレル夫人に手紙を出すためにわざわざ出かけていく町である。それは丁度『赤と黒』において、ヴェリエールから二リユールにブレという郡役所のある町を配したのと似通っている。これらの町は具体的には何も叙述されていないが、それだけにヴェリエールやナンシーの存在感を引き立てている。

また、この小説で主人公たちが心を通わせるビュレルヴィレルの森は、アンデイイの森と同様に、フランスの都市の郊外に広がるいくつもの広大な森が、自然のなかでのリクリエーション（娯楽＝再生）の場である事実を改めて思い出させる。

## 4

以上の三つの小説は、主人公たちの恋の進展に似通った地理を

示している。それはあたかも町中では愛し合う気持ちが阻害され、自然に囲まれたなかでこそ、そうした人間的な感情が取り戻せると、ロマン派的な主張をしているように見える。それでは残りのもうひとつの作品『パルムの僧院』（二八三九）ではどうであろうか。この小説は北イタリアが舞台であるが、後述するように全体に主人公ファブリス・デル・ドンゴの遁走劇といった様相であるので、かれの足跡を辿ると、いくつもの地名が登場する。しかしまずはおかれが生まれ育った場所を見てみよう。

この小説で主人公は一七九八年生まれと設定されている。ちなみに『赤と黒』のジュリヤンは一八〇八年生まれで、ファブリスより十年遅く生まれている。ファブリスが生まれる二年前に、ナポレオンが第一次イタリア遠征でミラノに入城した。親オーストリア派のデル・ドンゴ侯爵はミラノを引き払い、コモ湖の奥のグリアンタに逃れ、ファブリスはその城で生まれた。このコモ湖畔の城は次のように描写されている。

「その城はおそらく世界にも類い希な位置を占め、あのすばらしい湖水から一五〇ピエほどの高所に建てられ、湖水の大半を視野に収める」（第一章）

「城の正面の湖の対岸には、城を眺めるには絶好の位置となるメルツイ荘があり、そのうえにはスフォンドラータの神聖な森、湖をあんなにも逸楽的なコモ湖とレッコの方に流れる峻険さに充ちた支湖の二つの枝に分ける鋭い岬。この崇高で優

雅な風景は、世界でもっとも有名なナポリ湾の景色もこれに  
匹敵するとはいへ、凌駕することはない」(第二章)

スタンダールはこのあとで、コモ湖がジュネーヴ湖のように湖  
岸が開発されて投機と金銭の臭いを発散してなくて、自然のまま  
であることを強調している。「文明の醜さを思い出させるものは少  
しもない」とさえ付け加えている。

そこはスイス国境に三リユーしか離れていない場所とされる。  
デル・ドンゴ侯爵はこのミラノのいわば奥座敷の湖畔でオースト  
リアのスパイにミラノの動静を伝えるなどの連絡を取っている。

ファブリスはこの土地で村の子供に交じって幼年時代を過  
してから、十二才になってミラノのイエズス会の学校で教育を受  
けさせられる。ミラノには侯爵の妹で、ファブリスにとっては叔  
母のピエトラネーラ伯爵夫人が住んでいて甥の世話をするが、こ  
の叔母夫婦は侯爵とは反対にフランスの支持者で、イタリヤ王国  
(国王はフランス皇帝ナポレオンが兼務)の副王であるウジェーヌ  
公の宮廷に入りしている。たまに侯爵夫人がミラノの息子に面  
会にやってくるが、侯爵自身はミラノに足を踏み入れることはな  
い。しかも侯爵は妹が息子をウジェーヌ公の宮廷にお目見えさせ  
ようとしていると知って、ファブリスをグリヤンタに呼び戻して  
しまう。ファブリスは悲しむが、一年に一度だけ叔母の誕生日の  
前後一週間叔母のもとへ行くことが許され、これを楽しみにする。  
しかしまもなく王政復古となり、ピエトラネーラ伯爵はフラン

ス支配の時代について悪口を言いつのつた連中と決闘をして殺さ  
れてしまう。伯爵夫人は復讐を考えるが、兄のデル・ドンゴ侯爵  
の誘いでグリヤンタに共に住むことになり、甥と暮らすことがで  
きるようになる。ファブリスには六才年長の兄アスカニオがいる  
が、侯爵は長男を跡継ぎと定めてファブリスは眼中にない。ファ  
ブリスはこの地で母と叔母の愛を受けて一年近くを過ごす。

スタンダールはこのファブリスがデル・ドンゴ侯爵夫妻の子供  
ではなく、夫人とフランス人士官ロベール中尉とのあいだに生ま  
れた子供であることをほめかしている。兄が父にそっくりであ  
るのに対して、ファブリスには父の特徴を継ぐところがない。

ミラノとグリヤンタは、ファブリスと一五才年上の叔母ジー  
ナ・ピエトラネーラの心を繋ぐ場所である。ファブリスがこの二  
つの土地を行き来することで、かれらの絆が深まっていく。グリ  
ヤンタに二〇年ぶりで戻ったジーナは、そこに「幸福で平和な生  
活が待っている」と思う<sup>14</sup>。彼女は湖の眺めと城での生活に一六才  
の頃の心を蘇らせる。このあとファブリスは、ナポレオンがエル  
バ島を脱出して、フランスの皇帝に返り咲き、ベルギーに進撃す  
るといふ情報を聞くや、ナポレオンとともに戦うために家を出る  
決心をして、その決意を母と叔母に告げる。ジーナは出発を告げ  
に来たファブリスに「嬉しさと心配で」涙を流す。

『バルムの僧院』のこの最初の第一章、第二章がすべての発端で  
ある<sup>15</sup>。叔母ジーナの甥ファブリスに対する愛情の物語としてこの

小説を読めば、その愛はミラノとグリヤンタのあいだでナポレオン支配の末年の五年のうちに育まれたと言える。これ以後はその愛情の強い熾火がかきたてられ、ジーナはファブリスのためにあらゆる危難を免れさせるように力を尽くし、別の言い方をすれば、いわば甥のために生きていく。それらを列挙すれば以下のようになるだろう。

まず、ファブリスはナポレオンとともに戦うためにロンバルドイーアーヴェネツィア王国を密かに出国するが、ワテルローで戦ったあとグリヤンタに帰ると、この密出国が告発されて指名手配される。ジーナはかれをミラノに連れて行ったあと、ピエモンテ地方のロマニャーノ・デ・セジアに亡命させる（ファブリスの第一の逃亡）。ジーナはこの間ミラノのスカラ座でパルム公国の大臣モスカ伯爵と出会い、伯爵の策でサンセヴェリーナ公爵と名前だけの結婚をして、サンセヴェリーナ公爵夫人となり、パルムでモスカ伯爵の愛人になる。伯爵の入れ知恵で、ファブリスを将来パルムで聖職者にするためにナポリの学院に入学させる。

次に、パルムに戻ったファブリスは伯爵の力で司教補佐に任じられるが、女優のマリエッタに心を惹かれ、これに嫉妬した情人ジレッチに襲われ、返り討ちでこれを殺す。かれはカザルマッジョーレからフェッラーラ、ボローニャと逃走する（第二の逃亡）。ボローニャで知り合ったオペラ歌手ファウスタとともにパルムに入るが、その情人に決闘を挑まれ、相手を負傷させ、フイレンツ

エそしてボローニャへと逃走する（第三の逃亡）。その間、ジーナの懸命の運動にもかかわらず、パルムでジレッチ殺しの有罪判決が出る。ラヴェルシ夫人の偽手紙におびき出され、ファブリスは逮捕されパルムのファルネーゼ塔に収監される。ジーナはファルネーゼ塔からファブリスを脱獄させるために城塞長官の娘クレリアに協力を求め、それを実行。かれをピエモンテに逃がす（第四の逃亡）。

ジーナ・サンセヴェリーナ夫人はこのように、甥の事件の後始末をするが、それは宮廷での駆け引きであったり、実際の行動であつたりする。彼女は不本意にも陋劣なパルム大公にからだを許すことまでもする。

しかし最後は、ファブリスの心はクレリアの方に行き、甥は彼女の手の届かないところに行ってしまう。

それにしても、モスカ伯爵が嫉妬するほどのジーナのファブリスに対する愛とは何なのだろうか。叔母の甥に対する一般的な愛情を通り越して、近親相姦的とも見えるが、恋愛なのだろうか。それはすでに記したように、ジーナにとって、ミラノついでグリヤンタで、ナポレオン支配の最後の短い年月を、夫ピエトラネーラ伯爵や甥ファブリスと過ごしたよき時代が、唯一ファブリスのうちに姿を残しているからではないだろうか。愛し、守りたいものは、ファブリスとかれによって代表されるよき時代のすべてではないかと思われる。

都会のミラノに対するグリヤンタは、やはり自然にあふれる湖水地方の別荘地である。ミラノは交互に体制が変わるなかでオーストリア支持者とフランス支持者がぶつかる政治の町だが、自然に囲まれたグリヤンタは、デル・ドンゴ侯爵と長男アスカニオに、侯爵夫人、ジーナ、ファブリスが対立しているものの、それは顕著な対立関係では表れない。政治は人間の生きるころ、あらゆるところに浸透して人々を引き裂くのかも知れないが、それでも自然のなかでは、一瞬、そうした対立を忘れさせ心に人間を蘇らせる。それはパルムに暮らすジーナが宮廷の馳け引きに疲れると、ポー河の岸辺のサッカの別荘で自分を取り戻すところにも表れている。

## 結

以上見てきたように、スタンダールの小説においては、二つの地理の様相の異なる場所のあいだで物語が進行する。それが、『アルマンズ』のように作品全体を通してのこともあれば、他のもののように作品のはじまりにおける場合もある。しかし作品の最初ではあっても、それは全編を通じて、主人公たちの運命を強く決定づけている。ジュリヤンにとって、誕生の町ヴェリエールよりもヴェルジーで過ごした日々は、レナル夫人との愛を思い出させ、そのままに短い生涯が終わろうとするときにもそこでの日々

を思い出させる。リュシヤンは、ナンシーからパリに戻っても、この首都でいちばんの才色兼備の女性とされるグランデ夫人の愛を遠ざけて、ビュレルヴィレルの森のそぞろ歩きによって心を開いたシャステレル夫人を思い続けるであろう。そして『パルムの僧院』においては、ジーナ・サンセヴェリーナはミラノとグリヤンタの時代から離れることができずに、いつまでも甥のファブリスの庇護者であることを止められなかった。

人の一生のなかには、短期間であってもその過ごした場所が大きな影響を与えることがある。ましてその場所で忘れられない愛の思い出があったとすればなおさらである。実際の場所はもちろんブルーストの言うように時間のなかに属して、場所は変わらなくても人間が変わり、過去と同じ場所ではなくなる。しかし記憶のなかではその時のその場所がいつまでも消えない。また、その場所は比較する場所があつてはじめて輝きを強くする。スタンダールはそうした対象的な場所の構図のなかでリアリティーに富んだ作品を創造したのである。

テクスト

『アルマンズ』『赤と黒』は、ブレイヤード版『小説作品全集』第一巻（二〇

〇五）による

『リュシヤン・ルヴェン』は、ブレイヤード版『小説作品全集』第二巻

（二〇〇七）による

『バルムの僧院』は、セルクル・デュ・ビプリオフィル版スタンダール全集  
第二四、二五巻（一九六九）による

註

- (1) スタンダールは「ウオルター・スコットとクレージュの奥方」という記事のなかで、「すべての芸術は美しい嘘である。書いてきた人は誰でもそれを知っている。自然を真似よ、と言う世間の人の忠告ほど滑稽なものはない。自然を真似なければならぬ」と言っていることは分かり切っていることだ。でもどの点までか。そこに問題がある」と言っている（セルクル版全集第四六巻「雑録Ⅱ、新聞雑誌記事」二二三ページ）
- (2) スタンダールの『クレージュの奥方』讃辞については、「ある旅行者の手記」（プレイヤード版『フランス紀行文集』三三三ページ）や前掲書「ウオルター・スコットとクレージュの奥方」参照
- (3) ここではその土地が実在しているか否かは問わないし、仮に実在しているにしても、実在の土地と作品に描かれた土地の異同を照し合わせたりにするようなことはしない。ちなみに、ヴェリエール、ヴェルジー、ビュレヴィレール、グリヤンタなどの代表的地名は架空の地名である。
- (4) スタンダールは『ニュー・マンズリー・マガジン』一八二六年二月号に『オリヴィエ』の紹介記事を書いている。スタンダールは一月末には、この小説と同じく不能者をテーマにする作品に着手。はじめはデュラ夫人やラトウシユと同じく『オリヴィエ』というタイトルを考えていたことが、二六年一月二八日付メリメ宛書簡に書かれている（プレイヤード版『スタンダール書簡集』第二巻、九六ページ）
- (5) この小説の土地の描写からはじまる書き出しは、地形的、地理的にははっきりした概念を与えるものではない。大岡昇平氏の『武蔵野夫人』

の書き出しは、これにヒントを得ているものと思われるが、もっと明確である

(6) 『赤と黒』第一巻第八章（プレイヤード版『小説作品全集』第一巻、三九二ページ）

(7) 前掲書、第一巻第八章（三九五ページ）

(8) 草稿ではナンシーではなくモンヴァリエである。スタンダールはちにモンヴァリエをナンシーに変えるべくメモを残している。本稿ではナンシーとした

(9) 『リュシヤン・ルーヴェン』草稿第四章（プレイヤード版『小説作品全集』第二巻、一一四ページ）

(10) 前掲書、草稿第四章（一一六ページ）

(11) 前掲書、草稿第二〇章（三三九ページ）

(12) 前掲書、草稿第二六章（二八一ページ）

(13) 『バルムの僧院』第二章（セルクル版全集第二四巻、四八ページ）

(14) 前掲書、第二章（四八ページ）

(15) バルザックは『ルヴェ・パリジェンヌ』第三号（一八四〇年九月二五日号）掲載の「ペール氏研究」において、スタンダールの方法に触れ、最初の部分は、ワートルローにおけるファブリスの回想という形で示した方がいと述べている（通巻二七三〜三三二ページ）。しかしそれではスタンダールがこの作品の書き出しに込めた意味合いを無視することになる。スタンダールはバルザックの進言で冒頭部分を書き直そうとしたが、できなかった